

—心を痛めるもの—

三 溪 原 富 太 郎 翁 逝 く

噫 巨星墜つ。

三溪原富太郎先生は卒然として他界せられた。私は列車中でその訃報を知つたのである。私
はこれより先八月十四日ふと思ひ立つて、子供を伴ひ横濱驛から乗車して、原町田で乗換へ、
八王子を経て、大月に下車した。それから道を川口湖にとり、湖畔の宿に着いた。

翌十五日は稀なる快晴で、青空に富嶽の全貌を眺望し得て實に愉快であつた。回顧すれば五
十一年の昔となる。私は御殿場から徒歩して、日が全く暮れて漸くこの湖畔にたどり着き、一
夜を宿に明かしたことがあつた。

往時を冥想しつゝ、湖畔を逍遙し、古き記憶を手繰つたのであつたが、風物既に昔時を偲ぶ
よすがもない。只だ變らぬものは滿々たる湖中の碧水のみであつた。

この日一氣に五湖をめぐる盡して、靜岡に走り、驛前の大東館に入った。この宿も五十一年前、思ひ出の宿であつた。

翌十六日は久能山に登り、東照宮に参拜して、更に同地が草分けとなつた名物石垣苺栽培の状況を視察して、再び靜岡に引返し列車で歸路に就いたのであつた。

芋を洗ふやうな、夏の三等列車の旅は鐵道唱歌の宣傳とはおよそ別の世界であつた。小田原で夕食の辨當を買おうとしたが、身動きも出来ない始末で、やつとのこと夕刊一枚を窓から買ひとることが出来たのであつた。

その夕刊を披けると、はしなくも三溪先生の訃報が印刷されてゐた。私は初め自分の目を疑つたのであつたが、事實はまぎれもなき事實であつた。私は胸苦しさに居ても立つてもゐられない焦慮を感じ出した。列車の走るのを感じてはいるが、どの驛を、どこを列車が走つてゐるかは殆んど知覺がなかつた。

夢のような氣持ちで、横濱に下車したのは夜も八時を過ぎた頃であつた。私はこの日の夕食

を全く忘れ果てゝゐた。

思へば僅か十日の前である。六日の日私は三溪園に原邸を尋ね、家人にその病状を伺つて御見舞をして來たのであつた。病狀がこんなに切迫してゐる筈はなかつたのであつた。

三溪先生に初めてお目に掛つたのは、大正元年の秋で、場所は當時横濱公園内社交俱樂部であつた。この日私は招かれて、横濱財界の大立物七、八氏と晝餐の會食をなし、食後空中窒素固定法に就て色々説明を試みたのであつた。當時の同事業の概要に關し私の知るところを述べて、質疑にも答へるところがあつた。

この日會食した人々は、いづれも横濱で有名な方々であつたが、横濱に馴染の薄い私には、いづれの方々も初対面であつた。私は此處へ藏前高工の商議員である村田一郎氏に伴はれて來たのであつたが、散會後他の方々と一緒に住吉町寄りの、今の電車通りへ出た時にその内に居られた、中村房次郎氏が「この鈴木さんは左右田棟一さんの令兄です」と言つて並んで歩いて居た一人の方に紹介せられた。それが實に三溪先生であつたのである。

私もこの時始めて、これがあの三溪園の原さんかと、まじまじその風格を見据へると、この時の三溪先生は、忘れもしないが、見るからに洒爽な美男子で、着られた和服がびつたり身體につき、履かれた白足袋が何んとも言へぬ、上品さを見せてゐた。

この時最初の強い印象を受けてから、もう二十八年になつた。私と三溪先生との交渉は、この時以來長きに亘つて續けられ來つたのである。

最初の對面をしたその翌年、私は三溪先生の委任狀を携へて、空中窒素固定事業企劃の爲、歐洲に赴き滯留半歳に及んで、所定の行動を終へて歸朝した。これが三溪先生と私の第一回の交渉であつた。それから次で大正四年時は世界大戰が始まつて、間もないことであつた。大戰に影響せられ化學工藝品は極度に拂底し、底知らずの騰貴振りを見せた。この時或人が東蒙古に豊富な天然曹達のあることを報じ、これを蒙古王から買収してはどうか、との建策を三溪先生にしたのであつた。然しこの實地調査の任に當る、適當な人がないので探してゐるのだと言ふ話をしたのが、當時藏前の教授であり、原家に入入りしてゐた橋本重隆君であつた。

私はこの話を聽いて、自身でこの役を買つて出た。三溪先生は私の申出を喜んで呉れたが、その地點は馬賊の出沒する危険な區域であるので、豫め充分の準備をして貰ひたい。それに要する費用は幾何でも支出しやう、と言ふ非常に行届いた親切なお話であつた。私は大に勇氣づけられて、萬端の準備を整へて出發し、約四十日間を實地調査に費して歸來した。

この時の調査によると、曹達の埋藏量は、企業に値ひするほどの數量であるが、何分交通不便な僻地であるので、運搬費に多大の失費を免れず、又當時の東蒙古の社會的問題がからんで、事實上着手が困難な實狀にあり、旁々蒙古王との交渉も事前にその必要を認めないものと判断された。

そこで私はその實體をありのままに報告して復命したのであつた。これに對し三溪先生は全部私の調査に信頼せられ、この天然曹達採取の事業を全く放棄せらるゝに至つたのであつた。

この東蒙事件と相前後して、私は東神奈川に地をととして、セリス舍密研究所の創設に努力した。これは中村房次郎氏の經營に屬し、私が所長であり、主任に富山保氏が當つた。ところが大正

九年に至つて、中村氏の都合でこの經營を中絶されることとなり、一日も繼續困難と言ふ羽目に陥入つた。そこで私は救ひを三溪先生にもとめた。先生は今これを引受けて經營するには困難な事情がある。然し金を壹萬圓丈け寄附しよう。それで何んとかやつて見てはどうかと言ふ有難いお話であつた。それは確か大正九年の九月である。

越へて翌年の一月から、三溪先生の手で研究所の面倒を見て戴くこととなり、その時以來昭和四年に至るまで、先生の一方ならぬ御好意によつて研究所は安心して仕事を續けることが出来た。

三溪先生が、舍密研究所を經營されることになつて、先生は少なからず化學工業に興味をもたれるやうになつたやうである。その一つの證左として、先生は私と富山君とそれから原家側の幹部の方を加へて、毎月一回位の割で、三溪園の原邸で晚餐の御馳走になりながら、化學工業に關する話題を中心に談話を交換することになつた。

この御馳走は、いつも支那料理であつたが、何しろ先生は有名な食通であり、特に原邸で調理された自慢の御料理であつただけに、その美味なことは、今でも忘れられないものがある。

この晚餐會は大震火災の當時まで續けられた。こんな事が次ぎ／＼に起つて、私と三溪先生との關係は次第に深められて行つた。

昭和五年に私は六川町の丘上に、地を卜して現在の住居を新築した。私はこの機會に三溪先生の高風を偲び且記念するものが何か愁しかつた。恰かもよし、書齋兼應接間に古風の爐を切つたので、その爐壁に銅板を張り、これに先生の揮毫を願ひたいと考へた。早速お願ひすると、心よく引きうけて下さつた上に、先生自ら私の茅屋をお尋ね下さつて、爐壁の位置や寸法に就いて詳細な下調べをせられた。

私は先生の事を苟もせられざる態度と熱意に對し、深い畏敬を感じたのであつた。その書は“相對成春”と言ふ四文字で、先生の風格を偲ぶ雅致豊かな書である。私はこれを玉川堂に囑して槌起し爐を飾つたのである。些か分に過ぎるの感を抱いてゐたが、今先生の長逝に會つて、得難き記念とはなり、且夕相向つて、先生を追慕するよすがとなつたことは、私にとつては望外の賜である。

先生の書道に對する造詣の深いことは、今更絮説を要しないことである。先生の書が斯界に如何なる地歩を占むべきか、これ又爰に説明を必要としないことである。

更に私は昭和十年學校を退くに當つて、記念事業會が組織せられ、その事業の一つとして校庭へ記念碑を建立するに當り、碑文を徳富蘇峰先生に、書を三溪先生にお願ひしたところ、先生は長文の書を快よく諾せられて美事に書いて下さつた。

私が愛する學校を去つて、間もない或日のことであつた。三溪先生は不意に私宅を尋ねられて、記念として私に秘藏の渡邊華山筆老子出關の一幅を贈られ、且先生の筆になる由來記の副軸も添へて贈られた。華山の幅の藝術的價値に就ては説くまでもないことであり、私の家には全く過分のものであることは言ふまでもないことである。が然し私はこの華山の幅にもまして、先生の副軸に心をひかれるのである。私は先生のこの書をひもとく毎に、先生の生氣に接し脉々として迫るのを覺へる。これこそ私にとつては、二つとなき家の寶である。

三溪先生はまた彩管をとつても、堂々たる大家であつた。曾て先生はその筆になる、一茶舊

跡の幅を私に與へられた。これは先生が態々信州柏原在に赴かれ、一茶が晩年居住した土藏とその周圍の風光を畫かれたものであるが、畫面には更に先生自筆の讚が、躍如として一茶の面目を盡されてゐる。洵に繪も書も含蓄も三拍子揃つたもので、これ亦私の家寶として貴重するところである。

一體三溪先生は、健康美を充分發揮され、常に若々しく、適當な肥滿と勝れた血色の方であつた。しかも日常その健康につき細心の注意を怠られなかつたのであつたが、七八年以前に箱根に滞在されてゐるうちに、不幸十二指腸潰瘍に罹られ、今日に至るまで完全な回復を見られなかつた。

そのために、どこかに健康の勝れないやうな感じを受けて、お目に掛る毎に氣がかりとなつたのは私一人のみではないと考へる。然し非常な攝生によつて漸次快方に進まれ、外出せられる日も多くなり、特にホテルニューグランドへは屢々晝食のため赴かれるやうになつた。尤もこの時の食事は三浦博士の指導による特別な料理であつた。

私が晩年お目に掛つたのはこの晝食のホテルニューグランドであつた。それは今次の中日事變後、先生は事變の推移とその前途に對して、異常な關心と研究心をもたれ、去年の初秋頃から私に對しても、この問題に就ての意見を徴するために、時々ホテルニューグランドで會談したいと言ふお話であつた。私もこの問題には人一倍の注意をしてゐるし、又浪人の氣輕さで、別に定まつた要務のない身であるから、喜んでその都度出向いて互に意見を交したのであるが、今年の二月の末までの間に五六度もその機會があつた。

話し合ふ問題、その見解は必ずしも一致したものではなかつた。時には論争に花を咲かせたこともあつた。或日先生から非常に分厚な手紙を戴いた。巻紙で七、八尺もの長さであつた。文意は中日事變に對する、先生の意見を述べられたもので、文末には讀了後これを焼捨てられたいと添書きしてあつた。

この時の手紙を讀んで、沁々と感じたことは、三溪先生は決して單なる實業家ではない。又一口に紳商と言つて了へる人物でもない。實に烈々たる國士であり、憂國の士であると言ふことを深く刻みつけられたのであつた。

私は常々信じてゐた。それは三溪先生の眞面目は實にこゝにあつた。先生は幸か不幸か、その志すところと其赴くところを異にせられたのではあるまいか。世上で先生の書道畫道を目して先生の眞諦であるが如く考へてゐるのは間違つてゐる。之等は先生にとつては、要するに副産的のものであり、餘技であつたと私は考へてゐる。

又先生が情熱の人であることを、廣く印象せしめたのは、彼の大震當時、先生は始めて自ら陣頭に立つて、奮闘せられたあの記念すべき横濱復興會の創立に當つて、先生は熱烈なる語調と態度で開會の辭を述べられた。あの當時を想起する人々は、必ずこの私の觀察と論斷に同感の意を表せられる筈だと、私は信じてゐる。

先生は又私が權藤成郷先生と往復することに對し、或興味を感じられてゐるやうであつた。權藤先生が私に贈られた著書を借りたい、と言つて持ち歸られたこともあつた。三溪先生の志の存する一端を窺ふことが出来るのである。

三溪先生と私の相會したことは、前後三十年間、その幾回であつたかを數へることが出来な

いのであるが、話題の多くは時事問題であつた。又論議を上下した問題もそれであつた。先生は頗る多角の趣味と、交渉をもつてゐられたのであつたが、貿易關係のことや市政上の問題は、直接私の關與するところではなかつたし、藝術上のことは私は門外漢であつたので勢ひ話題となることが少なかつた。只だ時折り私からそれ等の問題に對して質疑をした場合は、素人の私にも充分納得の出来るやうに親切に且明快に教へられた。

先生が或問題に對して、述べられる意見は、その高風をそのまま問題化し、意見化したやうに頗る公平であり、極めて穩健なものであり、流石大家はちがつたものだと言ふ感じを私はいつも植ゑ付けられた。

私は先生から常に蒙を啓かれて來た。私の行き過ぎた考へ方は屢々是正せられた。就中私の最も先生に敬服するところは、先生の經營せられる事業が、如何に不景氣の風に吹き荒まれた時でも、又反對に如何に好景氣に沸き立つ時でも、先生の心境は不易不變、一抹の清風の如く淡々たるものであつた。先生の風姿は、大きいお寺の大廣間に悠然と禪榻に倚る先生を思ひ浮べると一番眞に近いやうな感がしてゐた。

心靜かに冥想せられる先生には窓外の雨も風も將た太陽も、何の關するところではなかつた。この澄み切つた先生の心境には、どうしても頭を下けないではゐられなかつたのである。

將に將たる風格と言ふか、世俗を抜く風格と言ふか、兎に角尋常一様の企て及ぶところではなかつたのである。

私は先生に就いて考へる時に、よくこんな事を考へて見た。先生は青木家から原家に入つた人であつたが、若し原家に入ることなくして、青木家に留まつて、自然の趣くところに任せたとすれば、どんな變化が先生の上にあつたであらうかと言ふことである。

勿論原家を繼がれてからも、一世の輿望を蒐められ、貴衆兩院に入ることとも一舉一投足の勞に過ぎなかつたし、若し望み欲せられるなれば、その地位名譽も多くは達せられたことゝ考へる。

然し先生は、如何に機會が來ても、如何に勸説せられても、一切表面に立つ様な事は斷り續けられた。然し必要な場合には、必要の努力は決して惜まれなかつた。否必要以上の努力をさへ屢々拂はれたのであつたが、總ては裏面の工作であり、椽の下の力持ちであつた。

先生が我實業界に、特に横濱貿易上に齎された功績は、洵に偉大なものであり、我政界就中

横濱市政の上に盡された功勞は甚大なものであつた。然し先生は些かも名利を追ひ、功績を表すところがなかつた。

先生は何故に、表面に立つことを斥けられたか、と言ふ點に就ては、勿論先生から伺つたこともないし、又先生の心中をこゝに忖度することは、可成り非禮なことゝ考へるのであるが、私の想像するところは、これは先生が他から横濱に來た人であり、所謂地の人でないと言ふところに、何等かの關聯があるのではないかと考へる。そうして又先生の人格と節操が自然斯くあらしめたものではないかと考へるのである。

若し先生が岐阜の豪農に生れた立場から考へて、そのまま生家に過されたならば、或はその生家を潰す位のことではせられたかも知れない。然し必ず先生は中央の檜舞臺に立つて、政界を縦横に馳驅せられたことであらうとも考へられる。或は臺閣の人であり、或はその首班に地位する人であり得たと考へられるのである。

三溪先生の一面には、これに値する充分の霸氣と、素質のあることを私は間違ひなく見透してゐると信じてゐる。

然し人の運命は、結局どうにもなるものではない。三溪先生の場合を指す許りでなく、この廣い世の中には、決して少ない例ではないのである。

若し果して私の言ふが如きであつたなら、三溪先生の運命は、その道程と結果に於てどう見てよいか、その判断はこゝには必要のないことだが、兎に角先生は二つの運命のうちその一つを進まれた。その進路に當つたのが我實業界であり、我横濱貿易であり、我市政であり、又原家そのものであつたのである。そうしてそのいづれもが、先生の出現によつて最も大きい恩恵を受けたのである。先生のはれたところが、どちらが本筋であつたか、否かは別問題として、兎に角その歩まれた道に萬全の努力を盡され、又完全の結果を得られたことは確かである。

三溪先生逝いて後、その知遇を得た人々は等しく、淋しくなつたとしみじみ述べた。先生の人徳の廣大であつたことが窺はれるのである。私個人から言へば、先生があれ程心を砕いた中日事變の結末を、見ないで逝かれたことはどんなにかお心残りのことであつたであらうかと残念でならない。天は何故今暫くの齡を先生に與へなかつたであらう。そうして先生に愛する

日本の潑刺たる新躍進の雄姿を見せて呉れなかつたのであらう。言つてかへらぬ事ながら、實に遺憾に堪へない次第である。

さもあらばあれ、先生は遂に逝かれた。然し逝かれて猶その後先生の遺風は香ばしく咲き出たのであつた。それは先生と殆んど兄弟の如き契を結ばれた中村房次郎氏、野村洋三氏、その他の方々によつて、先生の意が徹底的に守り通されたからであつた。

その一つは葬儀に當つて、一切の香花を受けなかつたことである。しかもそれが徹底的に實行されたことであつた。東京方面から一流の名士の贈られたものも例外なしに禮を厚ふして送り返されたのであつた。これは世間に例のないことではなく、又一見大した困難でもないやうに考へられるのであるが、いざ實行となると、仲々その通りには行はれぬのが常態である。眞にこれを徹底するには、非常な勇氣と決心が必要である。この勇氣と決心を、葬儀委員長始め委員の方々が固められた。その固められるに至つた根柢は何か、又何が斯く力づけたかと言ふと、それは言ふまでもなく先生の遺風であり、遺徳であつたと考へられるのである。

又三溪先生の遺骸は、逝去間もなく、又生前愛好された、國寶建築たる、所謂桃山御殿内の

住の江の間に安置せられた。その柩前には花環もなければ供物もない。只だ園内の池に主を失つて無心に咲ける蓮花を手折つて供へた丈けであつた。この閑寂さは如何にも生前の三溪先生を偲ばしめ高雅の極致を具現したものであつた。

この二つの異例は、先生の死によつて始めて實示せられた、尊い遺訓であると、私は深く信ずるのである。先生の流れを汲む人々は勿論のこと、世の大方の識者の方々に三思を煩しいところである。

それは十九日の朝十時半、三溪先生の柩は、思ひ出盡きぬ三溪園と永遠の別れを告げやうとした。柩は悲しくも再び開かれて、遺族始め近親の人々と最後の對面が行はれた。

この時であつた。ゆくりなくも園内の天瑞院の鐘樓から撞く挽鐘の音が、一打又一打、泣くが如く恨むが如く嬾々として響いて來た。

外には細雨音もなく降りそゞぎ、園内緑の木々は小枝さへ動きを靜めて、萬物死せるが如き靜寂の一瞬、挽鐘はまた尾を曳いて打ちならされた。

この鐘の音は列座の人々に名狀の出来ない何物かであつた。今は堪へ難き忍泣きの聲が聞へて來た。私はこの時これは現實の姿ではない。崇高な劇であると思つた。否劇以上の劇であると思つた。

世の劇に對しては、常に私は反感的に否定して來た。芝居は面白いが、餘り觀る氣がしない。何故と言へば、芝居は只だ人間社會のあるがまゝの眞似事をしてゐるに過ぎない。それ以上に何物もないではないか。人間は此の世に生を享けてゐる以上は、どこかに苦惱もあれば煩悶もある。人に知られぬ涙はあるものである。これに堪へる丈けでも人の重荷は大きいのである。その上何を好んで、芝居の上に乗で涙が流す必要が何處にあるだらうか。しかも高い涙料を拂つてまでそうしなければならぬ理由がどうしても私には呑み込めない。劇は自分自身でやるに限る。私は常に冗談半分に私の芝居哲學をやつたものである。

劇には反對して來た私ではあつたが、三溪先生の場合は、全く別問題であつた。恐らく千兩役者と言はれた團十郎であらうと、菊五郎であらうと、この三溪先生の最後に於ける劇、それは些かのケレンも巧みもない、自然の姿の劇、その大立役者である三溪先生の足下にも及ばな

いことを信ずるのである。

實に巨人の終幕として、これ以上の美事な大詰めはあり得ないと私は考へた。

この空前の大詰めを打つた作者、それは誰であつたか、黒頭布をとつて見ると、葬儀委員長中村房次郎先生の大寫しが現われたのであつた。役者と作者、一分の隙もない呼吸が合つたものであると涙ながら感じ入つた。祇園精舎の鐘の音、雨はまだそゝいでゐる。巨人逝て還らず。久保山齋場へと靜かに幕がおりた。

(昭一四・八・一九夜記)

西園寺公を悼む

平たい言葉で言へば西園寺公は私の最も好きな政治家であつた。先般九十二歳で薨去せられたといふ事は誠に悲しむべき事ではあるが、かくの如き高齡を以て逝かれたといふ事は一面からは又お目出度いことである。西園寺公の薨去によつて明治維新といふものを思ひ出すと共に

跡方もなく舞臺が消え失つた感じがする。清浦、金子兩伯が尙健在であるとは云へ兩伯共に維新後の人である。西園寺公は明治にならない慶應の時代に既に山陰又北陸の鎮撫使となつて幕末の戦争にも従事したのであるから、全くこの維新の大業に貢献した生き残つた最後の人であつた。

西園寺公の生れながらにして聰明であつた事は色々な事績によつて知れて居るので此の短文に於てこれを列擧する事は出来ない。非常に文化的な人であつたといふ事は倒幕の戦争からして京都に歸つた早々、明治二年に既に立命館を起したのである。これは西園寺公といふ高い門閥地位の人がこれが設立にあつたものであるから、忽ちにして多數の生徒が集つて來た。何と思ふてか治安に妨害有るとでも見たか、京都府がこれを解散せしめた。後年西園寺公の秘書であつた中川小十郎氏が公の志を繼いで今日の立命館大學を起したのである。公は生れながらの文化人であつたのであるから、外國に行つて勉強をしたいといふ切なる志を抱いて居つたが、明治三年にその希望が滿されてフランスへ行つた。十年間フランスに留つて十三年に歸朝して

その翌年に明治法律學校を設立して自ら教育に當つた。これが今日の明治大學の前身である。従つて一生同大學の名譽教授としてその名を残して居つた。如何に公が文教に關心を持つておつたかと言ふことがうかゞはれる。公は又確か二度文部大臣になつたことがある。私が初め教授の辭令を貰つたのは西園寺公であつた。西園寺公を好きな私は公の署名に大いに満足した譯である。フランスに於ける十年間の滞在は西園寺公をしていやが上にも文化人たらしめ又新思想の先驅者たらしめた。

殿上人とはいひながら比較的貧乏であつた公は、フランスの留學中全く平民的自由生活をした爲、歸つて來た後も其の流儀で以て横行闊歩して、直ちに東洋自由新聞といつた様な新聞の社長になつて文化的平民的の活動を始めた。廟堂の諸侯は驚いて忠告を試みたが之に耳を傾ける公ではなかつた。遂に明治天皇に奏上して勅命を以て公をして新聞社から縁を切らしめた。如何に當時にあつて新味のあつたかといふことを知ることが出来る。

政治界に於ける公の業績に就いて私の最も敬服した所は公の出所進退である。第一次西園寺内閣は積極政策が行き詰つた爲、内閣を投げ出して他のものをしてその行きづまりを打開せしめるのは最も公明な道であるとして、閣員の未練を残して引き止めるのも聞かず公の一存で鮮かに退却をした。第二次西園寺内閣は軍部の陰謀に引つかゝつた。即ち二ヶ師團増設問題で鮮かな政戦を爲して退却した。その後は第三次桂内閣で西園寺公の退却に共鳴した國民は憲政擁護の旗をあげて二ヶ月足らずして桂内閣を打倒した。今迄の多くの首相は退却振りが宜しくなかつた。進む時には鮮かであつても退く時に隊伍整整として敗軍の形をとらないのは名將である。西園寺公の退却は何れの場合に於ても名將の風格を残して居つた。晩年には唯一の元老として死に至るまで忠節を皇室と國民に盡して些かも毫碌の跡方がなかつた。この好きな老公に私は一度も面接する機会を得なかつた事を遺憾として居る。

大正七年の夏の終り頃に私の病妻が伊香保の温泉に靜養して、小さな別荘を貸りて住まつておつた。その隣りに同じ大きな別荘があつて其處に西園寺公が避暑せられておつた。二週間

に一度位の割で私は病妻を見舞つた。外に出て西園寺公の居られた家を垣の外から眺めると、明け放つた小さな座敷に公は端然と座して書見にふけつて居るのを時々見た。外に出る時には五尺四五寸の長さの煤竹の杖をついて出掛けられる。その節が九つある。二十年來私が九節ある同じ恰好な煤竹の杖をついて、在職當時は學校の教練又野外等の演習の時には常に放さなかつたのは好きな西園寺公の眞似をしたのであつた。その時分に宿の主人の木暮氏に一體西園寺公は何を讀んで居られるかと聞いたら、この頃も貸本屋へ行つて「鼠小僧」を買つて來いといふ事であつたからそれでも讀んでいらつしやるのでせうと答へられた。馬鹿の智慧は後からで公に接する好機をこの時に捉へ得なかつたことを今以て遺憾として居る。公の和漢洋に亘る讀書の該博な事は世間に知られてゐることである。その高き門閥の家に生れ、名利と權勢の外に逍遙し恬淡枯槁能く高人の風格を完ふし、然かも四代の聖天子に仕へ勳功一世を空ふし死して國葬の光榮を負ひ眞に古今獨歩の人たるの感あらしめた。齡とは云へどもこの巨人を失つた事は國家の大損害といはなければならぬ。

(昭和十五年十二月十一日)

校友戰歿諸君の靈に告ぐ

歲月匆忙として早くも、五年が流れた。去るものは、日々に疎しと云ふ、古い諺の中に、諸君の英靈が包まれて、更に暗い暗い陰へと、隠れ去るのは悲むべきことである。幾たびか諸君の靈を慰めんとて、筆を取らうとして、今日まで果し得なかつた。私も又世間なみに、あの古い諺の支配を免れなかつた。心から諸君の英靈にお詫びを申上げます。

柳條溝の夜半の一小警備隊の衝突が、あの様に世界の耳目を驚かした滿洲事變に、急轉するとは思はなかつた。蘆溝橋の曉の一發の銃聲は、中國四百餘州を戰塵の巷に捲き込もうとは夢にも考へなかつた。それでも皇軍の至る所、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るその情報は、國民の誰でもが手を拍つて喜んだものであつた。

戦争が熾烈になるにつれ、段々と戦死者も多くなつた。全國の所々に、盛大な公葬が行はれ、

戦死者は勿論、父兄一族まで名譽として門戸光彩を生ずる状勢であつた。昭和十三年の初夏、私は古稀に近い老軀を提けて、我々關係學校出身者の出征將士の、慰問旅行の途に上つた。朝鮮は羅津、城津から、滿洲は吉林、黒河から、北支は張家口から大同に至るまで、各地を遍歴して、幾多の出征者に出會ひ慰問した。北京の様な繁華で、安全な所に居るものは別として、長城附近や北地の荒涼たる僻地に戦ひ、又進駐する將士は、實にその勞苦見るに忍びぬものがあつた。北滿の阿城で一校友を探し當てた時の、私の感想は次の一絶であつた。

萬里空原萬里情

胡塵磧上訪君行

相遭相對同爰語

老淚滂沱洒塞城

萬里の空原萬里の情。胡塵磧上君を訪ふて行く。相遭ひ相對して同じく語るなし。老淚滂沱として塞城にそゞぐ。

長城以北は、所謂平砂萬里人煙を絶つのである。同時に中國の春秋戰國時代から、漢民族と北狄人との、絶へざる戦地で、至る所の古戰場は支那の名文名詩の生れた所である。中國文學を通じて、胡地の印象を受けた私自身は、その詩中の人となり、その文中の人となり、萬里征戎の健兒に會つた瞬間、お互に顔を見合せたまゝ、微笑だも湛へ得ず、又言葉を交ゆることも出来なかつた。

多くの人に親しまれて居る古來征戰幾人回と云ふ、唐詩の名句がある。今來た荒野を、鐵道の驛まで、ボロ馬車にゆられながら、今別れた彼の兒が何の日にか、無事で歸つて來て、再會できるであらうか。それとも無定河邊の骨となるのではなからうかと、冥想すると、急に心淋しくなるのであつた。

歸來行脚して、北は岩手、秋田より南は鹿兒島、宮崎に至り、至る所學校出身者と會し、私の見聞せし北支の戦況と、出征出身者の消息を傳へた。戦争は更に擴大して、大東亞戦争となるや、陸と海とに、はてしもない廣い戰場となつた。どこまで行けば、決戦の場所があるか、さつぱり見當がつかない。召集されて出征する弘陵の子弟は、日に増し多くなる。戦死者の數も

ふえて來た。學校の廊下や講堂に掲げられた戦死者の肖像は次第に多くなり終には新しく調達することさへ出来なくなつた。之等の肖像を見る毎に、特に見識りの風貌に接するときは、彼等は如何に奮戦したか、致命の重傷であつたか、將又即死であつたかなどと、想像して、如何にも痛心に堪へなかつた。

遠いガダルカナルやニューギニアの地は知らないが、セレベス、ボルネオから馬來半島までの間は、會遊の地として、私は記憶して居る。ジャングル戦や、酷熱瘴癘の苦しみや、特に絶海孤島の玉碎は、悲壯の極みである。或は水天鬚髯の洋上で、潜艦の厄に遇ひ、千仞の海底に葬られたものもある。地理に記憶のあるだけ、諸君の戦苦と戦死を思ふの念は、私には一層である。サイパンが陥落し、敵機が縦横に、我本土の空を馳驅するに至ると、銃後と云ふ言葉は全く消滅した。毎日の様に、各都市は空爆せられ、内地の死傷は、戦場よりも多くなり、我々の塹壕生活も容易のものではなかつた。

終に來るべき日が來た。云ふまでもない八月十五日である。一瞬天地が暗黒となつた。この日のご放送を拜聽して、泣かぬものはありますまい。首相官邸その他に於ける、今曉の焼討ち

事件のため、私の宅は午前十時頃から、特高や憲兵隊から、思はぬお客の來訪できん張した。ご放送の後、私は所用あつて、山下町の憲兵隊へ出かける途中で、私の宅へ来る二組の學生連中に出會した。その中の或ものは、聲を上げて慟泣したが、私は慰藉するに足る、充分の言葉が出て來ない、只胸一杯であつた。それからその月の末までの二週間は、私には間斷なき、又實に心痛の日であつた。

終戦後はや、五ヶ年の歳月が過ぎ去つた。今年の秋には、母校は創立三十年の記念祭を舉行せんとして居る。思出多きこの日に颯爽たる紅顔、生きて校門を出入する諸君を見ることのないのは實に残念である。嘗ては廊下の壁上に、講堂の内部に、諸君の肖像は、生ける如く、我々と對面して居つたが、それさへ今は何所へか消へ去つた。しかし一方千歳は愚ろか、昨の恩讎も今は兩つながら、朦朧として存在しない様になつた。去らば嘗ての敵國の戦死者も、味方の戦死者も、共に英魂であり、又忠魂であることに、變りはないであらう。變るものは、只勝敗の跡あるのみである。敗戦は諸君を、英雄より引き下ろして、凡夫となし、負ふべき名譽までも剝奪せられた。戦争を誘導したのは、軍部であるとして、凡ての責任を、軍部に負はせ

ながら、國家の命に従つて單に戰ふた諸君までも、軍部と一束にして見られ、終生諸君の勞を犒ふものなしとせば、私は諸君の不運を悲しまずには居られない。

事實戦争は軍部の責任であらう。併し一歛掘り下けて見れば、其所に政治組織の缺除がある、民族性の缺除もある。して見れば、敗戦の責任の幾割かは國民の負擔すべきは當然のことであらう。百パーセントの責任を軍部に負はしめて、平然として涼しい顔をして居ることは、責任回避で、又卑怯の行爲で、耻づべきことではなからうか。歡呼の聲を上げて、諸君を戦地へ送り出した私は、幽明相隔て、衷心より諸君にお詫びをする。今や國際状態は一變して、嘗ては鎬を削つて戦つた米英を初め他の諸國とも、講和問題に行かないでも既に友邦の如く、窮乏の我國へ救助の手まで差延ばして居る。恩讎二つながら、消へ去つた感ある今日、諸君は英靈として、又忠靈として蘇がり更生せずとも文句がないであらう。我々の國も、君主國より、民主國として更生した。更生國家に、更生英靈として諸君を迎へたい。不運なりし諸君！それで満足してもらいたい。我々同窓は永へに諸君を忘れないであらう。 (昭和二十五年九月)

噫！ 清水博士

一昨二十八日（昭和二十二年九月）の新聞紙上で、前樞密院議長清水澄博士が熱海魚見崎海岸から投身自殺した報道を讀んで驚いた。猶博士は本年五月新憲法發布の日に、自決の遺書を書かれて居つたとの事で、博士は天皇制の將來に對し、憂慮せられたものと報道せられてゐる。

私は清水博士とは、何等知人とか、先輩とか云ふ個人的關係はいささかもないのである。只憲法學者として、又行政學者として、同時に官僚の長老であつたことを知つてゐたのみである。

終戦と共に、一大衝動が全國に起つた。東京に於ては、尊攘同志會とか、國粹同盟、明朗會等の會員が續々と、宮城前や、明治神宮又愛宕山で、悲慘な自決をした。何れも二十代の青年で、不忠をわび同志と共に一死以て天壤無窮を祈るとか、忠魂誓つて皇城を守らんとかと、慷慨悲憤惜しげもなく、花の蕾を血に染めた。

既往は更らなり、未來永却も金匱無缺であるとの、矜持を持つ我國が、無條件降伏の敗戦になつた瞬間、彼等青年達の行爲の、是非善悪は別として、民族傳統の意義に對しては、血あり涙ある我等同胞は、同情と感激を捧げずには居られなかつた。

それから早くも、二年有餘の歳月が流れ去つた今日、博識練達の清水博士が、八十歳の老齡を以て、二十前後の青年の意義と、相照して九泉の下に、皇國を護らんとする、心情や實に傷むべきで、新聞紙上の三面記事の數行として、看過するに忍びない感がある。

本年五月三日を期し、施行せられた新憲法は、國民の歡迎し、服従し、且つ信頼する處である。天皇統治の大權を國民に移し、従つて天皇は政治の責任から、離脱したことは、法的にはたしかに國體の變化であることに相違なからう。併しながら我國古來からの、歴史的事實を考察すると、天皇と民衆の間に、直接統治争奪の闘争がなかつた。只奸雄逆臣の徒あり、それがため天日の蔽はれしことありしのみである。歴代の天皇は、臣民の休戚を以て一念とせられ、崇高なる道德を以て、君臨せられたものであつた。

政治の責任から離脱せられたことは、天皇御一身上の一面からすれば、寧しろ御幸福であらうとも考へ得るのである。由來民主的の理想と觀念は、我國に於ては、君主の側にも、又民衆の側にも、内的に潜在して、平和的に今日まで流れ來つて居る。專政は外面的で、精神的には、君民共治であつたと云つても差支へがなからう。兎に角建國以來二千六百年の間、我々國民が主上と仰ぎ奉つた傳統的感情は、拭い去ることは出來ない。又去らしめてはならない。去らばとて、統治大權の復辟を期する意志などは、寸毫もなきことは勿論である。萬古仰天皇の國民的感情を、民主々義、文化的平和の建設に向つて、集中することを、我々國民は顧慮すべきである。

明治維新には明治大帝は不世出の天授と英邁とを以て、曠古の大業を御成就遊ばされた。終戦後民主々義の新憲法の我國には、自然科學者として、この上なき御資格ある今上陛下が、在位せらるゝことは、開國新日本を建設せられたる明治大帝と相對照して、偶然とは考へられない、國家の幸福と云はねばなるまい。眞の自然科學の研究は、名利を追はず、私心に左右せられず、

天地の自然に一致し、好んで又楽しんで研究に没頭する、平和の使徒である。新憲法の我國に於ては、従來の國策を轉換して、文化政策を執らなければならぬ。文化政策は國民の教養の度を昂め、同時に世界人類の幸福に貢獻し得る多くの學者を持たなければならぬ。世界的な武將ナポレオンは、獨逸へ攻め入つたが、ワイマールの宰相詩人ゲーテには、暴力を加へざるのみならず、かぶとを脱いで、敬意を表して居る。我國にゲーテの様な學者、ニュートンや、ヘルムホルツの様な學者が、輩出したらどんなものであらう。無形の大海軍や大陸軍を建設したことも、同じ効果をもたらし得るであらう。否それよりも、猶一層の敬意を世界列國よりかち得るであらう。

軍人なき今後の我國に於ては、優秀なる青年が自由にその羽翼を伸ばし得る進路は、學問藝術の道にあることは勢の然らしむる處であらう。國家の品位を昂め、國威を宣揚し得る唯一の道とは云ひ難いかも知れないが、最も重要な進路である。我國の上下擧つて、この勢を助長することは、一つは我々の祖先へ對し、敗戦のおわびを申上げ、他は子孫へ對する義務であらう。従つて今日の急務は、徒らに目前の得失にとらわれず、その依つて來る處にさかのぼり、

之を克服しなければならぬ。即ち人心を復興せしめるため國策の第一義を教育に置かなければならぬ。

若し今上陛下にして、宮中の奥深き、又雲の上なる御研究室より、下界に降り賜ひ、民衆學者と共に、自然科学の御研究を樂しみ賜はば、實に我國文化の幸福であり、又我教育界に偉大なる影響を與ふるものあらん。

文化國家の建設に、又新生日本の再建に、今上陛下のあることは、明治大帝の再生であると、私は明朗なる氣分に、蘇生の思ひがある。清水博士以つて如何となす。足を踏み鳴らして、博士の教へを乞ひたい。果して足音、地下に達するや否やである。

抑々樞密院は我國憲法の番所であつた。顧問官は番人であり、議長はその番人頭で、清水博士は實にその番人頭であつた。千古不磨と考へられた帝國憲法が改正されて、民主國家の新憲法を見た、清水博士の胸中が如何のものであつたか、想像することは出来よう。敗戦と云ふ大地震は、古い帝國を土臺から、搖り動かしたのである。その瞬間的に受けた大衝動から、上は

國家の大官名士を初め、在外出征の野戰攻城、又海上の名將より、下は在野無名の憂國青年に至るまで、自決して國難に殉じたるもの數知れない。國家の大悲劇であつた。

自決の法は、切腹、ピストル、毒藥の三者その一を選び、首縊り水死に出づるものは、一人もなかつたと、私は記憶して居る。

猶り清水博士は、敗戦を去る二ヶ年有餘にして、事態の切迫が稍鎮靜に歸し、新憲法の發布後、従容として態々熱海へ赴き、水に投じたるその死は、大いに異とする所で、同時にその自決は憲法と何等かの關係あることを思へば、闇然として、限りなきの涙を誘ひ來るのである。

昔、中國の春秋戰國時代、楚の國に屈原と云ふ名臣があつた。法典憲章に通じ、楚の懷王に重用せられた。讒者のため貶せられ、古今の名文離騷を作り、汨羅の水に投じて死んだ。屈原は逐放せられたりと雖、楚國を慕ひ懷王を思ふの念切にして、死して忠臣の範を垂れる、その志は離騷と共に、千歳不朽に忘れられない。

清水博士の水死は、汨羅の屈原を思ひ出さずにおられない。たとへ博士に離騷の作なくも、共に人生の大悲劇にして、特に博士の場合は、帝政の末路に殉じたるものとして、永へに後の

人を傷殺せしむるであらう。

清水博士よ安んぜよ、我々は新憲法の下に、皇室を愛護して、平和の大道を歩み、不徳の罪を祖先に詫びつゝ、進むべき新なる道を、子孫に教へ残すであらう。さもあれ、環境閱歴の異なるため、私は博士と選ぶべき道に於て其方向を異にして居つた。博士を弔ふ一片の蕪辭果して九泉の下に達するや否や。